

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 二 號 第 四 十 六 卷

昭和三年二月一日發行

論 叢

歐米に於ける日本學研究に就いて……………經濟學博士 本庄榮治郎
 支那農業の片影……………法學博士 財部靜治
 銀行機構に於ける通貨の創作……………經濟學博士 小島昌太郎
 統計教育論……………經濟學博士 蜷川虎三

時 論

昭和十三年度の増稅……………經濟學博士 汐見三郎

講 演

新興化學工業……………工學博士 喜多源逸

研 究

生命保險事業に於ける投資の特性……………經濟學士 西藤雅夫
 企業結合と外部節約……………經濟學士 田杉 競

說 苑

一追放學者の觀たるナチスの經濟理論……………經濟學士 中川與之助
 ヴァイナナーの國際貿易論研究……………經濟學士 松井 清
 リカアドウの爲替論と購買力平價說……………經濟學士 有井 治
 リーフマンの問屋制度論……………經濟學士 堀江英一

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁 轉 載)

ヴァイナーの國際貿易論研究

松 井 清

一

一九三三年にハーバラー及びオーリンが新しい立場からした貿易理論の勞作を發表したことにより、この領域に於ける古典學派の長き傳統も漸くにして克服されたかに見えた。事實この二書の影響は餘りにも大きく、人々は今後貿易論の分野に於ても勞働價值説は恐らく跡をたつであらうと考へた程であつた。かうした人々の期待を見事裏切つて一九三七年にヤコブ・ヴァイナーの『國際貿易論研究』¹⁾が世に送られたことは、確かに一つの驚くべきことであつたに違ひない。人々は今更らの如く古典派の傳統が餘りにも強いことを知つたのである。

ヴァイナーが如何なる學問的立場の人ではあるかはかつて發行された彼の著書『ダンピング論』『カナダの國際貸借』等を讀むことによつて、既に吾々の知れるところである。彼はタウンシツグのよき後繼者として新古典學派の流に數へられてゐる。以下ごく簡単にこの新著の内容を紹介しておこう。²⁾

二

第一章及び第二章はアダム・スミス以前に於ける英國外國貿易論の研究にあてられてゐる。而してこの研究は同じ著者がかつて *Journal of Political Economy* 誌上に發表した同じ題名の論文に僅少の修正を加へて再録したものである。著者はこの研究に於て、あくまで經濟理論の立場を守りつゝ批判的であること、一々の學説の相反を、原典に溯つて明らかにすることにより、從來の研究に對立しようとしてゐる。從來の研究は大部分經濟史家か歴史學派に屬する人々の手に成つたものであり、そのため思想よりも事實に興味を持た

1) Jacob Viner: *Studies in the theory of international trade*, 1937.

2) なほ昨年十月の國民經濟學雜誌にも本書の紹介がのせられてゐる。松井榮一氏：ヴァイナー『國際貿易理論の研究』

れ、批判よりも理解に重點が置かれすぎてゐる。アダム・スミス以前の理論を事實と關聯させつゝ、すべてマーカンテイリズムとして一般化するが如きを彼は誤謬として退けるのである。彼はスミス以前に自由貿易思想、國際收支均衡の理論が存在したことを強調し、この時代をマーカンテイリズムと自由貿易論の對立に於て理解することこそ肝要であるとなしてゐる。

第三章及び第四章は謂ゆる地金論争の研究にあてられてゐる。一七九七年に於けるイングラント銀行の金支拂停止及びそれに續く通貨、爲替、及び價格現象は多くの論争を引起し、その論争は現在と殆んど差異のない程の高い理論的水準を示してゐた。金融學者にとつて極めて示唆に富んでゐるこの時代の論争は、同時にまた貿易を専攻するものにとつても無視しえないものである。それは金屬通貨及び不換紙幣の下に於ける通貨現象と國際收支、爲替相場、物價水準の關係の詳細な分析を含んでゐる。實際爲替理論はこの論争によつて著しく促進されたし、國際收支均衡の機構に關す

る理論は、ヒュームによつて到達された段階を著しく越えたのである。また近代信用經濟に於ける中央銀行の機能についての研究は、國際貨幣均衡の維持との關聯に於て、實にこの論争に於て先鞭をつけられたのである。ヴァイナールは問題をインフレーション的局面とデフレーション的局面に分つて考察してゐるが、それは地金支拂が停止されたインフレーションの段階と地金支拂が再開されたデフレーションの段階とに於て論争の形が變化したためである。

第五章は英國通貨論争と題され、一八二五年から一八六五年に至る期間英國で行はれた通貨學派 (Currency school) と銀行學派 (Banking school) の論争が取扱はれてゐる。ヴァイナールの要約するところによると先づ通貨學派の主張は次の如くである。純粹な金屬通貨の下に於ては、金の流出或ひは金の流入が直ちに而して自動的に流通貨幣量の減少或ひは増加を結果する。然るに現實の通貨は金と兌換紙幣との混合通貨であり、かゝる混合通貨は、紙幣の發行が適當に調整さ

れるのでなければ、金屬通貨の如く直座に而も自動的に作用することがない。適當な統制が行はれない場合には、紙幣は時には過剰に發行され時には不當に制限される。この動搖が好況及び不況を強調すると云ふのである。銀行學派は之等の命題の殆んどすべてを否定する。就中彼等は金屬通貨が通貨學派によつて主張されるような方法で作用することを否定する。金屬本位制の下に於ても、金屬通貨の外に銀行預金、爲替手形が存在し、之等は金屬と同様に價格に作用すると彼等は主張する。また金屬本位制の下でも金のすべてが流通するようなことはなく、その一部分は中央銀行に貯藏されてゐる。そして貯藏量に於ける變化は恐らく價格の上に何らの作用をも持ち得ない。かくて銀行學派によると、金現高と紙幣發行高とを平行せしめんとする通貨學派の主張は、預金及び貯藏金の統制なしには不可能となるのである。銀行學派は通貨學派の説を否定するにはしたが、之に代るべき何らかの統制策を自ら主張すると云ふことはしなかつた。彼等は預金の法

制的な統制は何人によつても欲せられず且つ不可能であり、また假りに可能であるにしても望ましいものではないと説いたのである。流通する紙幣の量は相互に競争する銀行の普通の操作によつて適當に統制されるものであり、兌換の必要條件さへ維持されるならば事業の必要量を超過しえないものである。この謂はゆるバンキング・プリンシプルこそ彼等の信條だつたのである。ヴァイナーはこの論争を事實と一つ一つの文獻について詳説する前に、更らにそれと地金論争とのつながりについて一言を加へてゐる。

以上五章のうちに盛られた内容はこの書を極めて特色のあるものたらしめてゐる。貿易論に於ける普通の教科書が歴史的認識を缺くか、そうでないまでも理論の内容以外にこれを排除して終つてゐるに對し、ヴァイナーが重商主義から筆を起し、更らに古典學派自體の内部に於ける學説の發展を詳細に跡づけてゐることは確かに優れた業績であると云はねばならぬ。吾々は重商主義と對比することによつて初めて古典派貿易論

の歴史的本質を明らかにしうるし、古典派内部に於ける對立を検討することによつてそれが如何なる社會層の利益を代表するかを知りうるのである。けれどもかかる領域の問題に對するヴァイナーの方法自體は必ずしも満足すべきものではない。彼が重商主義をとり上げて批判するのはいいが、その批判は重商主義の歴史性を認識した上での批判でなければ、古典派と同様の形式的批判に終つてしまうのである。また古典派内部に於ける論争を取扱ふに際しても、古典派を超えたより高い立場に立つのでなければ論争の眞に由つて來るところを明らかにし得ない。ヴァイナーが新古典學派の立場に立つてゐることは、新古典學派が方法的には古典派を一步も出てゐないがために、その問題の把へ方のユニークさにも拘らず、彼の敘述を極めて不満足なものたらしめてゐる。

三

第六章以下は普通の貿易論の教科書に見らるるよう

ヴァイナーの國際貿易論研究

な内容を形成してゐる。即ち第六章に於て先づ單純金屬通貨の假定の下に、國際收支の均衡を招來する機構に關する理論が取扱はれる。この理論は周知のよう
にマーカンテイリストの貿易差額論に對する批判として、古典派貿易論の、より廣くは自由主義的貿易論の中心的命題をなしたものであるが、ヴァイナーはこれを以て現在に於てもなほ支配的な理論であるとしてゐる。近年例へばオーリンの如き理論家がいのでて古典派の重大なる誤謬を指摘し、この證明は學界を漸く支配して來たかに見えるに拘らず、ヴァイナーは如何なる理由を以てなほも古典派を擁護するのであらうか。彼は云ふ。古典派を誤謬なりとする議論は主としてリカード及びミルをしか参照してゐない。またリカード、ミルに於てもその外國貿易に關する章のみしか参照してゐない。然るに吾々がこの二學者以外の諸著作或ひは彼等の書物の貿易に關する章以外を検討する時には、古典派の理論が必ずしも謂はるる如く誤謬でないことが明らかにならうと。かくてヴァイナーはヒュ

ーム、ホイットレーの如き古き文獻からウイルソン、イエンテマ、オーリン、ビグーの如き最近の文獻に至るまでそれは文字通り詳細な検討を加へてゐる。また『需要の相對的變化』『物價水準の概念』『實質交換比率の概念』『國內財の價格』『國際均衡に於ける攪亂のタイプ』『貴金屬移動と貨幣の流通速度』『商品移動と相對的價格水準』『爲替相場』等々の問題となるべきポイントは特に項を設けて正確を期してゐる。

第七章では具體的な機構への一步接近として、近代銀行操作との關聯に於ける國際機構が取扱はれる。單純通貨の假定の下に於ては機構の自動性は或る意味に於て自明と見えるまでに簡單に證明され得た。然るに通貨のうち非金屬的な要素が存在し、非金屬貨幣對金屬貨幣の比率が可變であり、且つそれが中央政府の任意の統制に委ねられてゐるならば、機構の短期間の作用様式に重大な相異が生じ、その自動性はしかく簡單には論證され得ない。多くの人々はかゝる管理通貨を世界大戰後の發見の如く考へてゐるが、ヴァイナー

によるとさうではなくで、一九世紀に既にこの問題が現實的な問題となつたのである。その世紀の初頭に交された地金論争、更らに下つては通貨學派と銀行學派の論争は何れも自動的通貨と管理通貨の區別を念頭に置き、この兩通貨の下に於ける國際機構について言及してゐる。かくてヴァイナーは先づこの論争に觸れながら問題の核心につき進んで行くのである。彼によると、その際に於ける重要な問題は『支拂手段の第一次的及び第二次的擴張』である。金屬的及び非金屬的通貨を共に含むところの金屬本位通貨の下に於ては、一國の支拂手段總量に於ける變化は二重の方向から行はれうる。即ち貴金屬の量は外國からの流入、工藝的目的からの解放、國內產出高の増加等によつて増加し、非金屬貨幣は中央銀行の發行増加、市中銀行の信用擴張等によつて増加しうる。支拂手段の量に於ける第一次的擴張と、第二次的擴張のかくの如き區別を以て、ヴァイナーは近代的條件の下に於ける國際貨幣機構を把握しようとしてゐる。更らに國際機構は短期貨

附の役割を考察にとり入れることによつて完全な形をとるに至る。彼は國際短期貸附に、銀行間のクレヂツト、預金の送附、外國爲替手段の購買、商業信用、外國市場に於ける長期證券の購買等の種類のあることを指摘し、何れにせよこれらは國際收支の調整に於て極めて重量なる役割を果すものであるとし、これについて詳細な敘述を與へてゐる。その後附されたカナダの經驗についての實證的研究は、かつての彼の尨大な研究の要約と、それに與へられたエンヂエルの批判への答辯を含んでゐる。章の最後に『國際機構と景氣變動』なる項目が置かれてゐるが、この問題については今後に於ける一層の展開が、希望されるに止まつてゐる。

第八章及び第九章は貿易からの諸利益と題してハーパーの謂はゆる貿易の純粹理論を取扱つてゐる。彼は古典派貿易論を厚生分析として把握することの必要を力説し、古典派は自身で意識してゐたと否とに拘ら

ず次の如き三つの問題を含んでゐたと云ふ。(1)比較生産費説——一定の所得を得るに際しての費用の節約が利益の標識となる。(2)利益の標識としての所得の増大(3)利益の國際的分割及び趨勢の指標としての實質交換比率。第八章はこのうちで比較生産費説の研究にあてられる。即ち「貿易が各國の自由に委ねられるならば、長期に於ては各國は實質費用に於て比較的使益を有する産業に特殊化し、その生産物を輸出する」と云ふ命題から發するすべての問題が検討される。先づこの説の起源について、それがトレンドズから發するかりカードから發するかの論争を問題とし、結局に於て起源如何の問題に拘らずリカードから出發することを以て妥當なりとしてゐる。然る後リカードの前提に觸れない事柄として貿易利益の歸屬の問題を論じ、更らにリカードの前提そのものに觸れる問題として數個の項目を挙げつゝ比較生産費説の成立可能を證明しようとしてゐる。項目の一つ一つを挙げようならば「二財以

上に於ける貿易』『二國以上の場合に於ける貿易』『運送費用』『遞増及び遞減費用』『價格、貨幣費用及び實質費用』『比較生産費説の實質費用理論への依存』『異つた職業部門に於ける勞銀差異』『生産要素の可變的比率と國際的特殊化』『生産要素の可變的比率と比較實質費用』『實質費用分析の代用としての機會費用分析』等であり、その内容はかつて彼が *Wirtschaftliches Archiv* に發表した論文に比してかなりの展開を見せてゐる。例によつて極めて多數の文獻が引用されてゐるが、その基礎的な傾向はタウシツグの發展にあるようである。従つて問題は彼自身が意識してゐるように、すべて實質費用理論の當否にかゝつて來るものであると云はねばならない。

第十一章では、實質所得の最大化の問題が論究される。外國貿易からの利益に關し、比較生産費説に於ては與へられた量の實質所得をうるために如何にして總費用を最少ならしめるかに重點がおかれてゐた。然る

に貿易理論の其の後の發展に於ては、外國貿易の所得部面に關する種々の方法が導入され、ミル、マーシャル、エツヂウオース、グラハムの説明を見ると、比較生産費の役割はむしろ少なくなつてゐるのである。ヴァイナーは彼等の説を引用しながら相互需要と實質交換比率の問題、實質交換比率と貿易利益の問題を考へる。更らにマーシャルとエツヂウオースについてはこの方面に於ける彼等の説の重要性に鑑み特に項を設けて研究してゐる。ところで實質所得による貿易利益の測定は専ら素材的富の世界のみに關するが故に現實の貨幣經濟には妥當しない。ヴァイナーは更らに進んで貨幣によつて測られた貿易利益を問題とし、その際クルノー、パローネ、アウスピツツ及びリーベン等の文獻を考察してゐる。

最後に貿易理論の方法に關する注意書が附されて大部のこの書は終つてゐる。この書の前半について言及した様に後半に於ける諸問題もつきつめればヴァイナ

一の新古典派的な立場に歸することによつて統一的に把握できるようである。國際收支の均衡を招來する機構についての理論を問題とするとき、それが單純金屬通貨の假定の下になされると、近代銀行操作との聯關に於て論ぜられるにかゝはりなく、彼の意圖するところは古典派理論の展開であり、従つて貨幣數量説こそ彼の理論の樞軸を形成するものである。生産過程から切り離して、商品數量と貨幣數量との相關關係から一切の價格現象を説明しようとする、かの貨幣數量説に附着して生ずる一切の問題が、何らかの形に於てヴァイナーの機構論に於ても問題となることを吾々は記憶しておこう。貿易論プロパーについては、彼の比較生産費説が、切實に實質費用論に結びついてゐるために、實質費用論にこそ人々の批判は集中さるべきであらう。實質費用の規定に於ける不明確さから出發する理論的缺陷は、それからまぬがれようとする彼の異常な努力と精密な裝備にも拘らず、實質費用の貨幣價格

化等の基本的な問題に於ておゝふべからざる程に具體的な形を以て見はれてゐるのである。

四

以上私はヴァイナーの新著を紹介するに當つて、問題の所在を指摘するための二三の批判的言辭を弄しましたが、この書が貿易理論のよき理論史を提供するものとして高き價値を有することは、彼の立場と方法の如何に拘らず、何人もこれを認めねばならぬであらう。殊に理論の無視され勝ちな現段階に於て、文獻に對する彼の稀に見る良心的な態度には學ぶべき多くの點が見出されるのである。